東南アジアにも半年ほど滞在した経験があるようだ。

とにかくいい本だ。まず，このシリーズの企画自体を高く評価したい。むつかしい理論を前提に新興諸国の問題にアプローチするのではなく，なるべく常識的な感覚で国家の問題を考えようとする姿勢は健全である。最近こんなに興味深い新興国家論を読んだことはない。このシリーズは，このあと，南米，トリニダッド，カリブ海諸国，ブラジル，南アジアと舞台を移すという。楽しみである。

本書の内容は，三つの部分にわかれている。第1部では，東南アジアの文化と人種構成が概括されている。第2部では，現在の国家像をつくりあげた後天的要因，たとえば歴史経験，政治行政，教育などの局面が検討される。第3部では，現代における問題点がひととおり議論され，157ページからはじまる結論部は味わい深いものである。

著者の東南アジアでの経験は少ないが，この本の内容をみると，一級の専門家であることがわかる。それというのも，かれがイギリス人であり，イギリス人のすぐれた学者がみなもっているすぐれた現実感覚をもっているからだろう。無駄な理屈をこねない英国流の堅実な学風が，本書に安定した生命感を与えている。本書は，一行一行が味わいをもち，それだけに読むのが難しい本でもある。随所にころがるなにげない断定が，一つ一つ問題をもっている。

新興諸国の政治については，アメリカの学者がむつかしい理論的研究を続けてきているが，かれらの才気走った理論に食傷したときに，このような本を読むとせいせいする。イギリス人学者の書いたこのような本には，学問の正しいあり方を暗示するなにかが秘められている。アメリカ流の社会科学は，論理的に突きつめるとどこまで行きつくのかわからない点に，不安を感じさせる。しかし，イギリス流の社会科学は，どこまで行っても，けっして不毛の非人間的な究極には行きはしないという保証がある感じで，やすらぎを覚えるから不思議だ。しかし，この点はだいじなことだと思う。

わたくしは，一読して，この本をたんなる民族問題の本だとは思えなかった。その枠を越えて，むしろ新興諸国の本質に問題点，すなわち，国民国家形成の問題とナショナリズムの問題を主題にしている感じだ。新興諸国のナショナリズムについて書かれた本はこれまで何冊かあったが，社会学的に，生きた現実のダイナミズムとしてのナショナリズムの生成要因を扱った，実証的な研究に乏しかったように思える。そのためには，ナショナリズムの理念史的研究ではなくて，Karl Deutsch が提案した“social communication” 概念ととりくまねばならない。この本は，あいまいな形でではあれ，そのような問題意識に立っていると思う。もっともイギリス人の常識といってしまえばそれまでだが，アメリカの学者に欠けているなにかを Hunter が示していることは事実だ。それをわたくしは，たいへん貴重に思うのだ。　（矢野　暢）

Hugh Tinker. *Reorientations, Studies on Asia in Transition.* London : Pall Mall Press, 1965. 175 p.

ビルマの専門家として名高い著者の最初の評論集である。いつもの密度の高い研究書と趣きが違い，軽く読める本になっている。それでいて，本書を読んで学ぶ事柄はけっして少なくはない。一つ一つの論文が，それぞれ南アジア，東南アジアのだいじな問題を扱っているので，全体としてまとまると，アジア問題の貴重な参考書になっている。それよりもまず，かれのこれまでの本ではなかなかつかめない Tinker のアジア観がはっきりわかるのはうれしい。かれはすばらしい政治感覚の持ち主のようだ。

全部で10編の論文が収められている。第1の論文“History in a Time of Transition”では，西欧の歴史学者とアジアの歴史学者とが「意見を異にする協定」を結べと提案している。第2の論文“The City in Asia”では，アジアの後進地域において都市が果たす役割が扱われている。都市の機能を政治学の研究課題にせよと提案し，同時に，東南アジアの都市が，社会機能を独占しすぎるのはよくないといっている。第3の論文“Community Development, A New Philosopher's Stone”では，地域開発という事柄がアジアでは魔術のような魅力をもつ事実が指摘される。これは，欧米の歴史に先例のない面白い実験だが，民衆の自発性を抑圧する傾向にあるのはよくないと断じている。第4の論文“Climacteric in Asia”では，40年代，50年代そ

して60年代のアジアの時代像を問題にし，将来に希望を見出そうと努力している。第5の論文 "India Today" は，インドがいま "in making" なのか „in breaking" なのかを問題にする。その解答を，インド人学者の文献のなかに求めようとするが，解答は得られない。第6の論文 "The Name and Nature of Foreign Aid" は，外国援助を外交史上の新しい現象とみなし，これのもたらす効果や問題点を扱おうとする。しかし，表面をなでるだけに終わっている。ただ，外国援助の一環としてやってくる技術専門家が，エアコンのある立派な家に住むとどういうことになるか，かれらはどうして短期間の旅行だけで帰って行くか，などのシニックなアプローチが効果的である。第7の論文 "Broken-Backed States" では，「東南アジアの国々は，西欧の国々なら国家の危機の原因になるインフレや革命などが危機にはならない。なぜなら社会がルースだからだ。」という命題を提出している。東南アジアの国家の強みは，"survival" できるところにあるという。第8の論文 "Race, Nationalism and Communalism in Asia" では，こと民族対立の問題に関する限り，欧米とアジアとで，問題の性質は同じである，という判断がなされている。

以下ははぶこう。しかし，このように，どの一つをとっても，着目点が卓抜で，解答もまた明快である。アジア問題についての一般の評論集として推薦したい。Tinker の評論は，今後もマークしなくてはならないようだ。　（矢野　暢）

William Marsden. *The History of Sumatra.* A reprint of the third edition introduced by John Bastin. Kuala Lumpur: 1966. x+viii+488 p.

著者は1754年にアイルランドで生まれた。兄 John Marsden が英国東印度会社の西部スマトラ駐在官を勤めていたので，Port Marlborough の書記官に任命され，1771年5月にベンクーレン（南部スマトラ西海岸の市で，会社の香料貿易の根拠地）へ赴き，1779年7月にスマトラを去った。この間の調査・収集材料，職務上得た資料をもとに兄や友人からの情報をとり入れて，1783年にこの本の初版を出した。その後新しい資料を得て改訂増補し，1811年にその3版を出したが，この本はそれを覆刻したもので，第3版に新しく加えられたスマトラ島の珍しい動植物や当時の景観の図版26葉が巻末に収められ，John Bastin の紹介が附された。第3版が稀覯書になっている現在，今度の覆刻は非常に喜ばしい。

本書の記述内容はそのフルタイトルが端的に示している。*The History of Sumatra, Containing an Account of the Government, Laws, Customs, and Manners of the Native Inhabitants, with a Description of the Natural Productions, and a Relation of the Ancient Political State of that Island.*

すなわち本書は「スマトラ誌」と称すべきもので，Raffles の「ジャワ史」，Crawfurd の「インド群島史」と並んで，英人の手になるインドネシア研究の古典とされている。

ところで著者の採った方針は，自分の見聞範囲内でスマトラ全体を概括的に記述し，同島を個々の地域，種々の居住民に分けて各々を詳論するよりも，むしろ同島の標準タイプともいうべき地域・原住民を取り挙げて，歴史・社会・法制・風俗・宗教の各面から包括的に観ることにあった。著者の標準選定は，今日の進歩した民族・社会学から見れば妥当性を欠くようだが，その記述は正確である。なおヨーロッパ勢力のこの島との接触，およびその植民過程・支配体制それに通商状況はあまり触れられていない。ただ近世以来ヨーロッパ勢力と交渉を頻繁にもったアチェーの16世紀以後の歴史が概観されており，注目される。

この本は初版以来目次も章別もなく，23群（旧版では21群）の見出し語の下に各々独立した叙述が成されているので，いささか不便である。また本書が記された当時は，スマトラ島の大部分および西部沿岸島嶼がまだ十分に調査されておらず，観察技術も整っていなかったので，今日から見れば物足りない点も多い。しかし本書がインドネシアの民族誌・言語・慣習法の研究上，先駆的役割を果たしたことは周知の事実である。ちなみに著者にはマライ語文法・マライ語辞典の2名著がある。

（中島慎二郎）